前衛か大衆か

――エリート理論とマルクス主義――

居安正

一、マルクス主義と大衆社会状況

H・S・ヒューズは、N・レーニンについて、「伝説」とことわりながら興味ある話を伝えている。すなわちパレートがエリート理論を最初に提示した『社会主義の諸体系』が「他のどんな反マルクス的著作よりもレーニンを大いに悩ませ、彼自身の反論を書くため一夜ならず眠れぬ夜を過ごさせた」[1]という。彼は他のとこでもこの伝説を紹介しながら、[2]その出所を示していない。しかしロシア革命前のレーニンのおもな亡命地がスイスであったことを考えると、その頃ローザンヌ大学にあって経済学者として次第に国際的な名声を獲得しつつあったパレートの名を、おそらくはレーニンも耳にしたはずであり、あるいは彼の著作を読んだかもしれない。しかし残念ながらレーニンの著作にはパレートへの反論もちろん、パレートの名称さえもみられず、レーニンがパレートの著作を読んだかどうかは、いまのところは定かではない。

パレートの『社会主義の諸体系』は、彼がエリート概念を提示した最初の書物として知られるが、エリート理論[3]

そのものは、彼に先立ってすでにG・モスカによって「政治階級の理論」として提示され、さらに両者の影響のもとにR・ミヘルスによって「寡頭制の鉄則」として示された。彼らはいずれも一八七〇年代に始まる第二次産業革命の進展による大衆社会の展開のなかに、普選の実施による大衆の政治の舞台への登場、すなわち大衆民主制の開幕を体験し、それをつうじてそれぞれの理論を構築するにいたった。そして彼らの理論、総じてエリート理論はその批判を、議会制を出現させた民主主義理論、同時にまたそれ以上に社会主義理論に向け、その批判の要点は、社会主義が理想とする平等な社会が実現不可能であるとするにあったが、その理由としては多数支配、あるいは人民による政治が技術的に不可能であるとともに、社会主義革命の担い手である労働者階級を中心とする大衆が、必ずしも政治にたいして関心をもたず、政治的に無能力であり、したがって彼らは少数のエリートに支配されざるをえず、エリートの操縦の対象として、たかだかエリートの周流のための踏み台とされるにすぎないというにあった。

レーニンがパレートの著作を読んだかどうかにかかわりなく、彼が社会主義革命を考えたのは、エリート論者たちが民主主義と社会主義への批判としてのエリート理論を提起したのと同じ状況においてであった。もちろん彼が革命を考えたのはツァーリズム体制下のロシアにおいてであり、エリート論者たちとまったく同一の状況ではない。しかし彼も、広くはヨーロッパのマルクス主義運動のなかで、その影響のもとに思考し行動したのであった。そのかぎり彼の理論と実践のなかに、エリート理論の提起した問題にたいするひとつの回答が示されている。この回答がレーニンのいわゆる「前衛理論」である。

実はマルクス主義の立場からエリート理論を直接にとり上げ、それの提起した問題への回答を行い、同時にそれを批判したのはN・ブハーリンであった。彼はその著『史的唯物論』において、ミヘルスの「寡頭制の鉄則」とともにパレートの「エリートの周流理論」にも言及し、エリート理論の提起した問題を「マルクス主義の文献ではほ

とんど論究されていない問題」であると述べるとともに、「この問題点は研究されなければならない。それというのもこの命題が正しいとすれば、ミヘルスによってひき出された結論、すなわち社会主義者は勝利するかもしれないが、社会主義は勝利しえないという結論は正しいからである」[4]と問題の重要性を指摘し、エリート理論に反論を加え、社会主義社会の実現の可能性を示そうとする。しかし彼がそのさい拠りどころとしたのは、マルクスの階級理論とともに右に述べたレーニンの前衛理論であった。

とはいえ、このレーニンからブハーリンへと継承された前衛理論が、エリート理論の提起した問題にたいするマルクス主義の唯一の回答であったわけではない。レーニンの前衛理論そのものが、ロシア社会民主党内において提起され、激しい論争をひきおこし、党を分裂させるとともに、ドイツのマルクス主義者のあいだにも批判をひきおこした。ということは、この前衛理論以外の他の回答も存在したことを意味する。ここではこの前衛理論とそれにたいする批判とを考察するが、それを理解するためにも、その前提として以下簡単に、この論争の生じるまでの労働者階級についてのマルクス主義の見解をみておこう。

周知のようにK・マルクスはF・エンゲルスとともに『共産党宣言』（一八四八年）において、資本主義の発展がその「墓堀り人」である労働者階級を成長させ、来たるべき社会主義社会の諸条件を成熟させるとして、未来社会への壮大なビジョンを示した。しかし四八年のドイツ革命の挫折いらい、マルクスの関心はもっぱら資本主義社会の内的矛盾の分析に向けられ、労働者階級が具体的にいかに革命を成就し、いかに社会主義社会を建設するかにかんしては、必ずしも明確な考えを示しはしなかった。後にエンゲルスが一八九〇年に『共産党宣言』ドイツ語版への序文に書いたように、マルクスとエンゲルスとが「当時すでに……『労働者の解放は労働者自身の事業でなけ

ればならない』という意見であった」[5]かどうかについては問題もあり、『共産党宣言』執筆当時の両者に少数の尖鋭分子による革命の戦略を指摘することもできる。

すなわち『共産党宣言』の書かれた当時は、イギリスのみでようやく第一次産業革命が終了し、まだ第二次産業革命は始まってはおらず、ためにヨーロッパ全般を通じて大企業も大工場も出現してはおらず、イギリスを除けば労働者の数もわずかであり、労働組合も熟練工の職業別組合にとどまり、今日のような大規模は労働組合も、さらにはまた社会主義政党もまったく存在しなかった。「マルクスが積極的に関わりあった組織は、構成員わずか数百名の宣伝団体である共産主義者同盟と、さまざまなセクトや労働組合のゆるい連合体である第一インターナショナルと、この二つぐらいのもの」[6]であり、この状態では彼らが少数の尖鋭分子による革命を考えざるをえなかったとしても不思議ではない。

ところがマルクスの生きているあいだはともかく、エンゲルスの晩年には状況は大きく変化した。第二次産業革命の進行とともに産業別労働組合の時代を迎え、普通選挙の実施とともに社会主義政党も出現し、とりわけ彼の祖国のドイツにおいては社会民主党が次第に支持者を増大させつつあった。エンゲルスが増大した労働者階級に希望と期待とをいだいたとしても不思議ではない。彼は『共産党宣言』の一八八八年の英語版の序文においてマルクスについて次のように書いた。「彼としては、共同の行動と相互間の討論から、かならずでてくるにちがいない労働者階級の知的発達にまったく信頼をおいていた。資本にたいする闘争の盛衰と結末そのものが、勝利よりむしろ敗北が、彼らがこのんでつかうさまざまな方策のふじゅうぶんさを骨身に感じさせ、労働者階級解放の真の条件にたいするいっそう完全な洞察に道を開かずにはいなかった」[7]。マルクスがはたしてこう考えたかどうかは問題であるにせよ、少なくともこれはエンゲルス自身の考えではあった。そして、これとほぼおなじ文章が九〇年のドイツ語

版への序文にもみられる。[8] このように彼は労働者階級の知的発達、したがってまた彼らによる革命を期待したが、この期待にこたえるかのようにドイツ社会民主党は、九一年のエルフルト大会においてはエルフルト綱領を採択し、マルクス主義の立場にたつことを示し、党勢をさらに拡大させた。

この状況のもとに彼は九五年三月、彼の死の五か月まえにマルクスの『フランスにおける階級闘争』への序文を書き、そこに七一年から九〇年にいたるあいだのドイツ社会民主党の得票数をあげ、それが九〇年には総投票数の四分の一にまで増加したことを報じ、「彼らは万国の同志に、いかに普通選挙権がもちいられたかという範例をしめして、一つの新しい、もっとも鋭利な武器をあたえたのであった」[9]と党の選挙での成果をたたえ、次のように少数者の奇襲の時代が過ぎ去ったとして、大衆そのものの変革への参加を期待した。「奇襲の時代、すなわち意識のない大衆の先頭にたった意識ある少数者が遂行した革命の時代はすぎさった。社会組織が完全に変革されるためには、大衆自身がその変革にくわわり、彼ら自身が、問題の本質はなにか、なんのために彼らは身体と生命をかけて行動をおこすのかを、みずからすでに理解していなければならない。このことを、吾々に最近五十年の歴史がおしえてくれたのだ」[10]。

ここには、労働者階級にたいするエンゲルスの楽天的な信頼の念が示され、彼とマルクスとがかって少数者による奇襲的革命を考えたとしても、それは完全に放棄され、革命が労働者階級によらねばならないと彼が考えるにいたったことは確かである。そして彼のドイツ社会民主党内における威信よりして、この考えが当時の党幹部一般の考えでもあり、やがてこの状況より修正主義をめぐる論争が生じることとなる。

レーニンが彼の前衛理論を提起したのは、ドイツにおいてこの修正主義が論ぜられている最中であり、彼はこの修正主義とロシア社会民主党内の経済主義とを重ね合わせ、経済主義の批判をつうじて前衛理論を構築するにいた

った。

(1) H. S. Hughes, *Conciousness and Society, The Reconstruction of European Social Thought 1990-1930*, Vintage Books, 1961, p. 78.

(2) H. S. Hughes, *Oswal Spengler*, 1962, p. 16.

(3) エリート理論については、居安正「エリート理論とエリート主義」、安田三郎他編『基礎社会学　第Ⅳ巻　社会構造』東洋経済新報社、一九八一年、一五一―七三ページをみよ。

(4) N. Bucharin, *Theorie des historischen Materialismus, Gemeinverständliches Lehrbuch der Marxistischen Soziologie*, 1922, S. 364. ただしロシア語原書は一九二一年に出版され、邦訳には佐野勝隆、石川晃弘訳『史的唯物論』大月書店、一九七四年、があるが、ここでは右のドイツ語訳をもちいる。

(5) エンゲルス「一八九〇年ドイツ語版への序文」『マルクス＝エンゲルス選集』第二巻下、大月書店、一九五〇年、五五〇ページ。

(6) D・マクレラン、重田晃一他訳『アフター・マルクス』新評論、一九八五年、一四ページ。

(7) エンゲルス、「一八八八年英語版への序文」、前掲選集、五四〇ページ。

(8) エンゲルス、前掲書、五四九ページ。

(9) エンゲルス、「『フランスにおける階級闘争』序文」、『マルクス＝エンゲルス選集』第五巻、一六七ページ。

(10) 同書、一七四ページ。

二、レーニンの前衛理論

ニコライ・レーニン、実名ラウジーミル・イリーイーチ・ウリャーノフは一八七〇年四月、ヴォルガ河畔の小都市シムビルスクに下級貴族の子として生まれた。[1] 父は数学教師をへて視学官となり、その功績によって貴族の称号をあたえられ、八六年に死亡した。レーニンはギウナジウムにおいてラテン語、歴史および文学に優れ、首席をしめたが、この彼に革命への道を進ませたのは兄の刑死であった。兄アレクサンドルもやはりギムナジウムを首席で

卒業し、弟とは異なって自然科学にすぐれ、セント・ペテルブルク大学に入学し、生物学を研究したが、父の死亡した翌年の八七年、アレクサンドル三世の暗殺の陰謀に参加し、それが発覚して死刑に処せられた。二一歳であった。

ツアーリズムにたいする反抗は、ロシアにおける資本主義の未発達のままに久しくインテリゲンチアを担い手とし、少数者の陰謀団による人民（悲惨な状況におかれていた農民）の解放を目指すナロードニキ運動として展開され、一八七三年から翌四年にかけての学生たちの「人民のなかへ」（ヴ・ナロード）の運動として最盛期を迎え、八一年にはアレクサンドル二世暗殺事件をひきおこし、レーニンの兄アレクサンドルの参加した陰謀もこの流れに属した。しかしアレクサンドル二世の暗殺はいわばナロードニキ運動の頂点を意味し、資本主義の発展にともなう労働者階級の増大は、同時にまたマルクス主義の導入をもたらし、次第に革命運動の担い手をマルクス主義者へと移し、彼らに労働者階級による社会主義革命への展望をいだかせるようになった。レーニンはこの動向のまっただなかにおかれ、兄の刑死をきっかけとして彼のいわゆる「職業革命家」への道を進むことになる。

彼は八七年六月にギムナジウムを卒業し、八月にカザン大学に入学したが、一二月に退学となる。学生集会に出席したのが理由であった。積極的に学生活動をしたわけではないが、兄との関係から危険人物視されていたのである。母の複学運動も功を奏さず、どうにか司法試験の受験許可をえ、九一年にはそれに第一位で合格し、九二年にサマラで弁護士を開業した。この間、八八年には兄の愛読したチェルヌイシェフキーの『何をなすべきか』によって革命家を志し、まずは「人民の意志」派との接触によって革命運動に参加するようになった。そして九三年にペテルブルクへ移ってから、マルクス主義者たちのサークルに参加し、マルクス主義の影響のもとに関心を労働者階級に移すようになった。[2] 九五年にはスイスにおもむきプレハーノフらに会い、彼らと直接に接触することによって、

いわゆる正統的なマルクス主義者として帰国し、ペテルブルクでの扇動活動のために逮捕され、九七年二月から一九〇〇年一月までシベリアへ流刑となった。

この流刑期間中に彼はクループスカヤと結婚し、また九九年には有名な『ロシアにおける資本主義の発達』を発行するが、同時に後の有名な「前衛理論」の着想をえた。それまでの彼は、すでにみたドイツ社会民主党の立場とほとんど異ならない立場、むしろやがて彼が批判する経済主義に近い立場にいた。たとえば九五年末から翌年夏にかけて書かれた「社会民主党綱領草案と解説」の綱領草案の部によれば党の任務として、「ロシア社会民主党は、労働者の階級的自覚を発達させ、彼らの組織化に助力し、闘争の任務と目標とを指示することによって、ロシア労働者階級のこの闘争を援助することを、自分の任務として宣言する」[3]と書かれ、解説のところにおいては「党の活動は、労働者の階級闘争に助力することでなければならない。党の任務は、……労働者の運動にくわわり、その運動のなかに光明をもちこみ、労働者がすでにやりはじめているこの闘争において、彼らを援助することである。党の任務は、労働者の利益をまもり、労働者運動全体の利益を代表することである」[4]と述べ、その具体的な内容としては階級的自覚や政治意識の発達の促進、労働者の組織化への助力などを説明し、ここでは闘争の主体はあくまでも労働者階級そのものであることが示されている。

さらに九七年末に書かれた「ロシア社会民主主義者の任務」においては、彼の名とともに有名な「革命的理論なしに革命的運動もありえない」[5]と書くとともに、まず「『人民の意志』派のあいだでは、ブランキ主義、陰謀主義の伝統がおそろしく強い。それは、彼らには政治的陰謀の形よりほかには政治闘争が考えられないぐらい強いのである。だが、社会民主主義者はそういう狭い見解はあずかり知らない。彼らは陰謀を信じてはいない。彼らは、陰謀の時代はとうに過ぎさったと考え、また、政治闘争を陰謀に帰着させることは、一方では政治闘争を法外にせば

めることを意味し、他方ではもっともまずい闘争方法をえらぶことをいみする、と考えている」[6]と述べて、人民の意志派の少数者の陰謀主義を明確に否定し、社会民主主義者の任務は「プロレタリアートを教育し、訓練し、組織することであり、絶対主義のあらゆる現れに罪の刻印をおし、警察政府のあらゆる騎士どもをさらし台に釘づけにし、この政府に譲歩をやむなくさせるような政治的扇動を、労働者のあいだで行うこと」[7]であり、あるいは労働者党は「プロレタリアートの階級闘争を指導し、労働者のあいだに組織と規律を発達させ、労働者がその当面の経済的必要のために戦って、資本からつぎつぎに陣地を戦いとるのをたすけ、労働者を政治的に教育し、絶対主義を系統的に、たゆまず追及し、警察政府の強い爪をプロレタリアートに感じさせているツアーリズムのバシバズークの一人ひとりを追及する」[8]ことであるとされる。

これらに見られるレーニンの見解は、ほとんど当時のドイツ社会民主党の立場と異ならない。このレーニンに転機をあたえたのは、ロシアのマルクス主義者における経済主義の台頭であった。それは労働者階級の闘争を経済闘争に限定し、政治闘争をブルジョワジーにゆだねるべきであると主張した。この主張はレーニンにとっては、ドイツ社会民主党内の修正主義と同様に社会主義社会を永遠の未来へおしやるものと思われた。なぜなら労働者階級そのものは日常の狭少な利益にとらわれ、けっして革命にまでは進むことができず、ために労働者の直接の要求にこたえようとする経済主義は、社会主義革命を放棄する修正主義にほかならないからである。彼はK・カウツキーのベルンシュタイン批判に学ぶとともに[9]、自己の従来の考えを含めて党のありかたを考えざるをえなかった。クループスカヤによれば当時の「イリイッチは眠ることをやめて、おそろしく痩せてしまった」[10]という。彼がここで直面した問題は、まさにエリート論者が指摘した労働者大衆の政治的無能という現実であった。この現実にたいして彼が提起したのが彼の「前衛理論」であった。

この新しい出発は彼の流刑の終了とともにはじまり、まずは一九〇〇年一二月の『イスクラ』の創刊号所載の「われわれの運動の緊要な諸任務」[11]に簡潔に示され、翌年には「何らはじめるべきか」に明確に提示された。そしてそれは翌二年には詳論されて『何をなすべきか』として出版された。奇しくもパレートが『社会主義の諸体系』の第一巻を発行した年である。それは直接には、当時のロシア社会民主労働党内に台頭してきた「経済主義」を批判したものであるが、ブハーリンによってエリート理論への反論の拠りどころとされているように、そこには間接ながらエリート理論への反論が示されている。きわめて論争的なこの書において、レーニンがエリート理論の指摘する労働者階級の政治的無能力をどのように考え、社会主義の可能性をどこに見いだしたかを検討しよう。

レーニンは労働者階級の政治的能力の限界をはっきりと承認する。「労働者階級が、まったく自分の力だけでは、組合主義的意識、すなわち、組合に団結し、雇主と闘争を行い、政府から労働者に必要なあれこれの法律の発布をかちとるなどのことが必要だという確信しか、つくりあげえないことは、すべての国の歴史の立証するところである」[12]。労働者の意識はもっぱら日常生活の直接的利害といった狭小な範囲に限定され、そこから生じるのは、たかだか労働条件の改善への要求であり、したがって労働者の自然発生的な運動は、せいぜい組合主義にとどまり、けっして革命にまでは進むことはできない。しかもさらにこの状態を放置すれば、労働者は資本主義社会の支配的イデオロギーに従属させられる。なぜならイデオロギーは社会主義イデオロギーか、さもなければブルジョア・イデオロギーであり、しかもブルジョア・イデオロギーは、「社会主義イデオロギーより、その起源においてずっと古く、いっそう全面的に仕上げられていて、はかり知れないほど多くの普及手段をもっている」[13]からである。してみれば労働者の運動を自然のままに放置すれば、けっして社会主義社会は実現されないであろう。社会主義社会の実

現をめざす社会主義者はまさに「何をなすべきか」を問わねばならない。

この問いにたいしてレーニンは、社会民主主義者の任務として、労働者階級の「自然発生性と闘争すること、ブルジョアジーの庇護のものにはいろうとする組合主義のこの自然発生的な志向から労働運動をそらして、革命的社会民主主義の庇護のもとに引きいれること」[14]を提起する。

労働者階級の自然発生的な運動が組合主義にとどまり、経済闘争をこえることができないとすれば、「階級的・政治的意識は、外部からしか、つまり経済闘争の外部から、労働者と雇主との関係の圏外からしか、労働者にもたらすことはできない」[15]ず、そのため労働者階級の自然発生性と闘争して、彼らのなかに入って宣伝と扇動とをおこなって彼らを階級的に統一化して、社会主義革命へと指導するための組織が必要とされる。してみれば「政治闘争に精力と確固さと継承性とを保障できるような、革命家の組織をつくる」ことが、社会民主主義者の「第一のもっとも緊急な実践的任務」[16]ということになる。

ここに革命家と呼ばれるのは、「職業的に革命的活動に従事する人々」[17]であり、政治警察と闘争して、宣伝と扇動によって大衆を組織するために「職業的に訓練され、多年の修業によって修練をつみ」[18]、「専門的に社会民主活動に全身をささげた人々」[19]、あるいは「永年の修業を経……た無条件に革命に身をささげた人々」[20]である。これらの人びとによって構成され、労働者階級を革命へと指導するのが「前衛党」にほかならない。してみれば前衛党が、労働者の自然発生的な労働組合と異なることはいうまでもない。まず第一に、労働組合が労働者の日常の直接的な利益にかかわる問題を解決するためにつくられた労働者の組織であるのにたいして、前衛党は何よりも革命を目指し、それが職業革命家の組織である点に本質的な相違がある。したがって労働組合ができるだけ多数の労働者を含み、広範なものであり、そのようなものとしてまたできるだけ秘密ではなく、公開されているのにたいして、前衛

の「組織は、必然的に、あまり広範なものであってはならず、またできるだけ秘密なものでなければならない」[21]。なぜなら革命家の党は、たえざる政府との闘争状態におかれ、「未熟な労働者たち」をかかえ込んでは有効には戦えず、また敵のまえにその姿をさらしては敗北をまねくだろうからである。

また、このように組織された前衛党は、整備された専制政府の政治警察に対抗して革命を成就するには、必然的に専門化と集中化をともなう。前衛党の効果的な活動は、従来の未経験で不器用な活動の手工業性と分散性を克服し、一方では専門化した機能分担による多様な宣伝と扇動の展開を、他方では決定権と指導権の集中によるそれらの統一化とを必要とする。「専門化は必然的に集中化を前提し、また逆に専門化によって集中化が絶対に必要になる」[22]。こうして「秘密活動のいっさいの糸をその手に集中する、このような強力で、厳格に秘匿された組織、必然的に中央集権的となるほかない組織」[23]が必要とされ、ここでは「完全な公開性」あるいは「すべての職務の選挙制」といった「広範な民主主義」は不可能である。なぜならそれは、専制政治のもとにあっては組織を国家へ売り渡すことを意味するからである。「専制の闇のなかで、憲兵によるひっこぬきがひろくおこなわれているところで党組織の『広範な民主主義』をうんぬんするのが、空虚で有害な遊びごとでしかないことがわかるだろう。これが空虚な遊びごとだというのは、革命的組織で実際に広範な民主主義を実行したものは、いまだかって一つもなく、また自分ではどんなにそうしたくても、実行することはできないからである」[24]。こうして「われわれの運動の活動家にとって唯一の真剣な組織原則は、つぎのようでなければならない。すなわち、もっとも厳格な秘密活動、もっとも厳格な成員の選択、職業革命家の訓練である」[25]。

党員を「無条件に革命に身を捧げた」職業革命家に限定しなければならないというレーニンのこの考えは、一九〇三年のロシア社会民主党の第二回大会において、党員の資格問題としてレーニンによって提案され、反対派との

あいだにはげしい論争をまねき、党をいわゆるボルシェヴィキとメンシェヴィキに分裂させるひとつの要因となった。党員資格をめぐるレーニンの主張は採用されなかったが、レーニンは中央委員会の選出においては多数を獲得し、いわゆる多数派を形成するにいたった。トロツキーは、当時のレーニンの多数派工作の対象とされながら、レーニンには賛同せず、彼の立場を批判したが、この大会におけるレーニンについての彼の叙述は、当時のレーニンの状況をよく伝えている。「はげしい党内闘争において、彼が自制心を失ったのを私がこの目でみたのは、前にも後にもこれが唯一の場合であった」[26]。

そしてレーニンはさらに翌四年には『一歩前進、二歩後退』を書き、「党は階級の先進部隊としてできるだけよく組織されたものでなければならない。党は、せめて最小限度にでも組織に服する分子だけを加えさせなければならない」[27]と改めて主張し、反対派にはげしい批判を加えるとともに、「組織問題における日和見主義者の立場」、すなわち「散漫な、結束の固くない党組織の弁護、党大会および党大会のつくった諸機関から出発して上から下へ党を建設するという思想（いわゆる『官僚主義的な』思想）にたいして彼らが示した敵意……中央集権主義に反対して自治主義を支持する彼らの傾向」[28]が党を解体させるとして「部分にたいする中央部の権利と全権との拡張」[29]を重ねて強く主張した。この書の執筆当時のレーニンについてはN・ヴァレンチノフが伝えている。「この書をかいている三カ月間のあいだに、彼は驚くほど変わった。あんなにも頑強で、力と生命力に溢れていたレーニンが、頬を黄色におちくぼませ、痩せ細ってしまった。いつもはすばしっこく生き生きとしており、軽い嘲りの色をうかべていた彼の眼はどんよりしてしまい、時にはまったく死んだような眼になってしまった。四月の終わりには、一目でレーニンは病気か、それとも何かによってひどくすりへらされてしまっていることがわかった」[30]。

この叙述を、経済主義にたいした時のレーニンについてのクループスカヤの叙述、さらに第三回大会におけるレ

ーニンについてのトロツキーの叙述をあわせ考えると、レーニンが彼の前衛理論にかけた執念のようなものを感じざるをえない。それだけに彼はさまざまな批判にもかかわらず、彼の主張が多数に支持されなかったからといって、自己の見解を放棄して多数に従うわけにはゆかなかった。形式的には多数に従いながらも、彼は現実には自己の見解にしたがって党とは別個の中央委員会によってボルシェヴィキ党をつくりだし、革命にそなえたのであった。いわば分派活動をおこなったわけである。この成果をわれわれは後に検討するであろう。

(1) レーニンの生涯については河合秀和『レーニン―革命家の形成とその実践』中央公論社、一九七一年、David Shub, *Lenin*, Pelican Books, 1966, Bertram D. Wolfe, *Three Who made a Revolution. A Biografical History*, Pelican Books, 1966, Robert Conquest, *V. I. Lenin*, 1972, Rolf H. Theen, *Lenin, Genesis and Development of a Revorutionary*, 1773. などが参考になる。なおマルクス＝エンゲルス＝レーニン研究所編、有村有三訳『レーニン伝』Ⅰ・Ⅱ、大月書店、一九五三年は、すでにレーニンの生前からはじまっていたとされる歪曲（R. H. Theen, *op. cit* p. 34.）のために、あまり役にたたない。

(2) この初期のレーニンの労働組合との関係は以上のレーニンにかんする生涯についての各書にふれられているが、詳しい考察としては、R・バイプス、伊藤弘文訳『レーニン主義の起源』河出書房新社、一九七二年、がある。

(3) レーニン「社会民主党綱領草案と解説」、レーニン全集刊行委員会編『レーニン全集』第二巻、大月書店、一九五七年、七八ページ。

(4) 同、九四ページ。

(5) レーニン「ロシア社会民主主義者の任務」、前掲『レーニン全集』第二巻、三三八ページ。

(6) 同、三三四ページ。

(7) 同。

(8) 同、三三六―七ページ。

(9) クループスカヤ、内海周平訳『レーニンの思い出』上、青木書店、一九五四年、四七ページ。

(10) 同、五六ページ。

(11) レーニン「われわれの運動の緊急な諸任務」、前掲『レーニン全集』第四巻、四〇〇―六ページ。

(12) レーニン「なにをなすべきか」、前掲『レーニン全集』第五巻、三九五ページ。
(13) 同、四〇八ページ。
(14) 同、四〇六ページ。
(15) 同、四五一ページ。
(16) 同、四七八ページ。
(17) 同、四八四ページ。
(18) 同、四九六ページ。
(19) 同、五〇一ページ。
(20) 同、五〇九ページ。
(21) 同、四八六ページ。
(22) 同、五〇五ページ。
(23) 同、五一三ページ。
(24) 同、五一六ページ。
(25) 同、五一八ページ。
(26) L・トロツキー、高橋爾郎訳『トロツキー自伝』I、筑摩書房、一九八九年、八九ページ。
(27) レーニン「一歩前進、二歩後退」、前掲『レーニン全集』第七巻、二六五ページ。
(28) 同、二〇八―九ページ。
(29) 同、四二六ページ。
(30) N・ヴァレンチノフ、門倉正美訳『知られざるレーニン』風媒社、一九七二年、一八一ページ。

三、R・ルクセンブルクの批判

レーニンの前衛理論にたいしては、当然のことながら経済主義者を中心としてメンシェヴィキからはもちろん、他のマルクス主義者のあいだからも批判がでた。そのうち有名なものとしては、L・トロツキーのものと、R・ル

クセンブルクのものをあげることができる。とりわけトロツキーの批判は、「代行主義」の名のもとによく知られるとともに、問題の所在を簡潔に示してもいる。要するにレーニンの前衛理論は、革命において労働者を前衛党が代行し、前衛党を中央委員会が代行することを意味するが、このことはひいてはまた、中央委員会を独裁者が代行することを意味することになるとして、後のスターリニズムを予告するものとなった。

「党内の政治においては、こういった方法は、さらにのちにもふれるように、党の組織が党そのものを『代行』し、中央委員会が党の組織を代行し、最後には『独裁者』が中央委員会を代行するということに帰着する。さらに『人民が沈黙をまもっている』とき、諸委員会が『方向』をつくったり廃したりすることに帰着する。党外の政治においては、こういった方法は、自己の階級的利害を意識したプロレタリアートの現実的な力によってではなく、抽象されたプロレタリアートの階級的利害の力によって、他の社会諸集団に圧力をかけようという試みのなかに現れる。こういった『方法』は、すでに見たように、われわれが原則的に採択した綱領をわれわれの党活動の内容に『アプリオリに』同一視することを、前提とする。要するに、この『方法』は社会民主党の政治的戦術の問題を完全に無用化するものである」[1]。

ところが、このように書いたトロツキーは、周知のように一七年の革命にさいしては、ボルシェヴィキに参加し、レーニンとともに大衆を指導し、革命を成功に導いたのであった。そして彼は、後には『自伝』において、「当時の私は、数百万の大衆を旧社会にたいする戦争に引き入れるために、革命的政党にとってどのような厳格かつ絶対的な中央集権主義が必要であるかということを、理解していなかったことは、少しの疑いも容れる余地はない。……私はまだ、レーニンの中央集権主義が自立的に十分考え抜かれた明確な革命的概念から生まれてきたものであることに、思い及ばなかった」[2]と述べて、レーニンにたいする批判が誤りであったことを認める。とすれば彼の批

判をここでこのように簡単にでも紹介することは彼の意に反することであろう。

この彼にたいしてルクセンブルクのばあい、民族問題についてはレーニンと意見を異にすることもありながら、あのベルンシュタインの修正主義にたいするきびしい批判と、さらに後にはK・カウツキーらの正統派にたいする批判とによって、ドイツ社会民主党内において最左翼に位置し、さらにポーランドの社会主義運動とも関係をもち、ためにレーニンと彼をとりまく状況をもっともよく理解しながら、しかも前衛理論においてはもっとも激しくレーニンを批判し、最後まで自己の見解を変えず、さらには一九年にはドイツ共産党を創設し、革命を指導したが失敗して射殺されるなど、多くの点ではレーニンにもっとも近く、それゆえに彼との異なった見解をもっともきわだたせることになる。

ルクセンブルクはレーニンの『一歩前進、二歩後退』が出版されるや、ただちにドイツ社会民主党の機関誌『ノイエ・ツァイト』に「ロシア社会民主党の組織問題」を発表し、ブルジョア民主主義の欠如した絶対主義下のロシアにおいて社会民主党に課せられたさまざまな困難な問題に深い理解を示し、さらには中央集権的な資本主義の経済的基盤と中央集権化された近代国家においては、それに対応して社会民主党が労働者階級の全体的利益を代表するものとして、また中央集権的な傾向を内在させることを承認しながらも、レーニンの前衛理論と組織論を「容赦なき中央集権主義」あるいは「超中央集権的な方針」であると批判する。

この批判の背後にあるのは、レーニンとは異なった彼女の労働者階級にたいする見解である。すでにみたようにレーニンは労働者階級の政治的能力に限界を認め、それゆえ社会主義革命には外部からの職業革命家の前衛党による指導が必要であるとしたが、彼女によれば「社会民主主義的運動は、階級社会の歴史にあってはじめて、そのあらゆる瞬間、そのすべての経過において、大衆の組織と自主的な直接の行動を顧慮する最初の運動」[3]であり、かっ

てのジャコバン・ブランキスト型の少数の陰謀団のそれとはまったく異なったものである。ブランキスト型の少数の陰謀団は、労働者大衆を考慮せず、それじたいの革命的奇襲を計画し、ために陰謀的な中央集権主義を必要とする。しかし社会民主主義運動は、階級社会における階級闘争そのもののなかから形成され、したがって「社会民主党は実際は……労働者階級それ自身の運動であり」[4]、そのようなものとして「闘争においてはじめて補充され、闘争においてはじめてまた課題についても明らかとな」[5]り、レーニンのいうように労働者階級の外部にある職業革命家の組織でもなければ、またその中央委員会によって課題を与えられるものでもない。

こうして社会民主的運動は、労働者階級の前衛によってはもちろん、いわんやその中央委員会によって一方的につくり出され指示されるのではなく、労働者階級全体によって創造されなければならない。してみれば「このことからすでに明らかとなるのは、社会民主的な中央集権は、その中央集権のもとへの党の闘士たちの盲目的な服従、機械的な服従にもとずくものではないということであり、そして他方においては、すでに確固たる党幹部へと組織された階級意識にめざめた労働者階級の中核と、すでに階級闘争にめざめて階級的啓蒙の過程にある周辺層とのあいだには、絶対的な隔壁はけっして設けられないということである」[6]。

したがって党の中央集団は「社会階層の意識的な政治行動による自発的な協調」[7]によらねばならない。この観点からみるばあい、レーニンの前衛の組織論の「生活原理は一方においては、明白な活動的な革命家たちの組織された部隊を、彼らをとりかこむ環境、たとえ未組織的ではあるが革命的・活動的な環境から鋭く抽出し分離することであるとともに、他方においては、党の地方組織のあらゆる表現への中央機関の厳格な規律と、その中央機関の断固たる決定的な直接の関与」[8]とであり、したがってこれは、「陰謀サークルのブランキスト的な組織原理を、労働者大衆の社会民主的な運動へ機械的に転用することである」[9]と批判する。そして彼女はさらに、レーニンが浮動的

なブルジョア・インテリゲンチャと異なってプロレタリアートは、工場という学校において規律と組織へと訓練され、このことが、中央集権化された労働者政党を実現するための前提条件をなすと考えたことにたいし、工場における労働者の盲目的な従順と政治的な行動における自発的な行動とは異なるとし、労働者の「この奴隷的な規律精神を打破し、根絶することによって、プロレタリアートははじめて新しい規律――社会民主主義の自発的な自己規律――へと教育される」[10]という。

これはロシアの運動の歴史の示すところでもある。「最近の一〇年間の運動のもっとも重要なもっとも実り豊かな戦術的な転回は、たとえば運動の特定の指導者たちによって、いわんや指導的な組織によって『案出』されたのではなく、むしろそれはいつも、解放された運動そのものの自然発生的な産物であった」[11]。したがって、そこでは「社会民主的な組織の主導と意識的な指導は、きわめてわずかな役割しか演じなかった」[12]。このことはたんに最近のロシアにおいてのみではなく、ドイツや他のあらゆるところにおいても同じであり、社会主義的な運動そのものが、資本家階級にたいする労働者階級の創造的な行為であり、したがって社会主義的な戦術もまた、「しばしば基本的な実験的な階級闘争という偉大な創造的活動の持続的な連鎖の結果」[13]であり、したがって「社会民主的な戦術が中央委員会によってではなく全党によって、より正しくは全運動によって創造されるとすれば、党の個々の組織には明らかに行動の自由が必要なのであり、これのみが、その時どきの状況によって提供されたすべての手段を闘争の強化のために完全に利用し、革命的な創意の展開を可能とする。ところが、レーニンによって弁護された超中央集権主義はわれわれには、その全本質において積極的な創造的精神ではなく、不毛な夜警的精神によって支えられているように思われる。彼の思考過程は党活動の結実にではなく主として束縛に、その展開にではなく制限に、運動の結集にではなく困窮化にむけられている」[14]。

このように彼女は、レーニンの理論をブランキスト的と批判するとともに、さらにレーニンの理論が社会民主党内の日和見主義にたいする批判と関係していることに注目して、次のようにレーニンの理論の背景を説明する。

ヨーロッパ諸国における社会民主党内の日和見主義は一般に「ブルジョア議会主義」と、そこにおける社会民主主義運動とを前提とする。すなわち議会主義そのものが議会をつうじての改良活動とか、諸階級あるいは諸政党の協力、あるいは平和的な発展への期待といった日和見主義へと道を開くとともに、社会主義運動の発展と社会主義政党の影響力の増大そのものが、議会主義的な傾向を守る防壁として作用し、一方では他党にたいする協調と、他方では内部の分裂をもたらし、自治主義的な分権の傾向と日和見主義とを生みだす。しかし絶対主義ロシアでは事情はこれとは異なり、「そこでは労働運動内の日和見主義は、総じて西方におけるように社会民主主義の強固な感情の結果、ブルジョア社会の腐敗の結果ではなくて、むしろ逆に運動の政治的な後進性の結果なのである」[15]。というのもロシアにおいて主として社会主義運動の主な供給源をなしている「ロシア・インテリゲンチャは、西ヨーロッパのインテリゲンジアに比較すると、明らかにはるかに不確かな階級的性格をもち、言葉の正確な意味においてははるかに『階級脱落的』である」[16]からである。そこから彼らは理論的に無定見となり、浮動的となり、日和見的となり、そのため彼らは「主観主義」に傾き、それは一方では独善的なテロルにおちいるとともに、他方では組織上の無原則な分権主義と自治主義とをもたらすこととなった。したがってレーニンが批判の対象とする日和見主義は、ロシア社会民主主義の後進性のもたらしたものであり、この分権主義と自治主義とは、民主的にして強固な大衆的組織によって克服されるものであるが、レーニンの前衛の組織論はこのことを確認せず、「全知全能」のひとつの中央委員会によってそれを克服しようとし、そのかぎりそれは、「すでにしばしばロシアにおける社会主義思想を悩ませたのと同じ主観主義をわれわれに伝える」[17]。こう述べて彼女は、レーニンの理論がロシアの後進性の産

物であるとする。

さらにルクセンブルクは、党員を職業革命家にかぎるべきであるとするレーニンの見解にたいしても批判的な立場を示す。資本主義社会の経済的破綻と政治的破産は、非プロレタリア諸分子をも社会民主主義運動へ合流させるであろう。そのばあい党規約のあれこれの箇条の適用によって彼らをしりぞけようとするのは素朴な幻想であるとともに、ふさわしくもない。「プロレタリアートの階級的代表である社会民主党は、同時に社会の総括的な進歩的利益とブルジョア的秩序の抑圧されたすべての犠牲者の代表であり、……社会民主主義は政党として次第に、さまざまな不平分子の避難所となり、党は現実には少数の支配的ブルジョアジーにたいする人民の党となる」[18]のであり、非プロレタリア的な要素をプロレタリア的行動に結集し同化し吸収することによって、革命的政党へと成長する。もちろん、その過程においては誤りをおかすこともあろう。しかし「現実に革命的な労働者運動がおかす誤りは歴史的には、もっともすぐれた『中央委員会』の無謬性にくらべて実り豊かで価値も多い」[19]。

ルクセンブルクのこの批判にたいしてレーニンは反批判「一歩前進、二歩後退――エヌ・レーニンのローザ・ルクセンブルグへの回答――」[20]を書き、「『ノイエ・ツァイト』にのせてもらうために、カウツキーにおくったが、カウツキーは掲載を拒否した」[21]と『レーニン全集』には書かれているが、「実は、ローザ・ルクセンブルクがその論文を最初に回覧され意見を求められたのだが、侮蔑的に『むだ口』だと言って斥けたのだった」[22]という。「むだ口」であるかどうかは意見のわかれるところであろうが、レーニンの反論は、ルクセンブルクがロシア社会民主党内の対立の詳細を知らずにレーニンを曲解したものであるとするものであり、そのかぎりでは批判にたいする反論とはなっていない。

(1) L・トロツキー、原暉之訳「われわれの政治的任務」、菊池昌典『トロツキー』人類の知的遺産67、講談社、一九八一年、一四八ページ。
(2) L・トロツキー、高田爾郎訳『トロツキー自伝』I、筑摩書房、一九八九年、一九〇ページ。
(3) Rosa Luxemburg, "Organizationsfragen der russischen Sozialdemokratie", *Gesammelte Werke*, Zweiter Halbband, 1972, S. 427
(4) *Ibid.*, S. 429.
(5) *Ibid.*, S. 428.
(6) *Ibid.*, S. 429.
(7) *Ibid.*, S. 430.
(8) *Ibid.*, S. 425.
(9) *Ibid.*, S. 429.
(10) *Ibid.*, S. 431.
(11) *Ibid.*, S. 431-2.
(12) *Ibid.*, S. 432.
(13) *Ibid.*
(14) *Ibid.*, S. 433-4.
(15) *Ibid.*, S. 438.
(16) *Ibid.*
(17) *Ibid.*, S. 443.
(18) *Ibid.*, S. 441.
(19) *Ibid.*, S. 444.
(20) 前掲『レーニン全集』第七巻、五〇九―二一ページ。
(21) 同、六〇七ページ。
(22) J・B・ネットル、諫山正他訳『ローザ・ルクセンブルク』上、河出書房新社、一九七四年、七四ページ。

四、前衛か大衆か

以上に考察したレーニンの前衛理論とそれにたいするルクセンブルクの批判は、要するにレーニンの前衛党の組織の重視と、それにたいするルクセンブルクの大衆の自然発生性の重視の対立ということになる。この対立についてはまずT・クルフの指摘するように、レーニンとルクセンブルグのそれぞれのおかれていた状況を考えなければならないであろう。レーニンはツアーリズムのもとでの社会主義運動の分散的な無定形な状態にたいし、中央集権的な強固な組織の必要を強調しなければならなかったのにたいし、ルクセンブルクは、ミヘルスが批判の対象としたドイツ社会民主党の官僚主義的な組織強調主義のもとで、大衆の自然発生性に党の革命的再生を期待した。[1] レーニン自身が一九〇三年の党大会において、「経済主義者たちは棒を一方に曲げすぎた。棒をまっすぐにのばすためには、棒を他のがわに曲げかえす必要があった。そこで、わたくしはそうしたのである」[2]と語ったように、経済主義者にたいして彼がいくらか組織の役割を過大評価したとすれば、ルクセンブルクはまたこの過大評価にたいして、彼女の右にみた状況から過大反応し、大衆の自然発生性を過大評価したことになろう。

前衛党のみで革命が可能でもなければ、また自然発生的な大衆のみでも革命が可能ではないとすれば、レーニンとルクセンブルクとが前衛党と労働者大衆の自発性へのそれぞれの過大評価を自覚すれば、両者は接近するはずである。そして、それをもたらしたのが一九〇五年の日露戦争のロシアの敗北のもたらした革命であった。

革命に示された労働者のこの自然発生的な運動の高揚は、渓内謙[3]やD・マクレラン[4]の指摘するように、レーニンに従来の労働者階級と党組織についての彼の見解の再検討を促すこととなった。「プロレタリアートの革命的教育は、平凡な、日常の、打ちのめされた生活の幾月幾年によってもなしとげえないまでの前進を、一日のうちになし

とげた。『死か、それとも自由か』という、英雄的なペテルブルクのプロレタリアートのスローガンは、今や全土にこだましてひびきわたっている。もろもろの事情が驚くほどの速さで発展している」[5]。ペテルブルクと類似したことはロシアの各地において、何らの組織的な指導もなく生じている。「いま全世界のプロレタリアートは、胸をとどろかせながら、かたずをのんで全ロシアのプロレタリアートを見まもっている。わが国の労働者階級が英雄的にはじめた、ロシアにおけるツァーリズムの打倒は、すべての歴史における転換点となり、あらゆる民族、あらゆる国家、地球のあらゆる地点の、すべての労働者の事業を容易にするものとなるであろう」[6]。こうして「いつもは日陰の生活をしており、そのためにしばしば皮相な観察者から無視され、もしくは軽蔑されさえする大衆が、積極的な闘士として政治舞台に登場する。この大衆は、万人の目のまえで瀬ぶみをし、進路をさぐり、任務をさだめ、自分や自分のすべてのイデオローグの理論をためして、実践によってまなぶ。この大衆は、歴史によって負わせられた巨大な世界的任務に応じようとして英雄的に努力する」[7]。

大衆の自発性にたいするこの新しい認識にたって、レーニンは集会、結社、出版の自由といった新しく迎えた状況のもとに、党のそれまでの状況を反省して、新たな党員の獲得と新たな党のありかたを提起する。「わが党はながいあいだ地下にあった。……わが党は、過去数年のあいだ、そこで窒息していた。地下運動はなくなりかけている。大胆に前進せよ。新しい武器をとれ。それを新しい人人にわけあたえよ。自分の拠点を拡大せよ。すべての社会民主主義的労働者を呼びよせよ。彼らを、何百人、何千人と、党組織の隊列に加入させよ」[8]。こうして窒息状態にあった党を新しい党員によって再生させようとする。そして新しい党員を迎える党の組織は、これまた新しくなければならない。すべての社会主義的労働者を党組織に迎えいれたいという「この希望が実際に実現されるためには、労働者を『招待』するだけでは不十分であり、これまでのような型の組織の数をふやすだけでは不十分である。

そうだ、このためには、すべての同志諸君がいっしょになって新しい組織形態を、自主的、創造的につくりあげることが必要である。ここではあらかじめきめられた規範はけっしてしめしてはならない。というのは、この仕事はすべて新しいものだからである。ここでは、地方の条件の知識と、重要なことは、全党員の創意とがもちいられなければならない。労働者党の新しい組織形態、より正しくは、その基本的な組織上の細胞の新しい形態は、旧サークルに比較すれば、絶対にいっそう広範なものでなければならない。さらに、おそらく、新しい細胞はあまり厳重な定形をもたない、いっそう『自由な』、『ルースな』組織でなければならないであろう」[9]。

こうしてレーニンは、組織の形態についても成員の創意にもとずく自由なありかたを提起する。とはいえ彼は、従来の前衛党の中央集権制による統一的な構造についての考えを放棄したわけではない。党は革命的な状況によって新しい党員を迎えいれ、職業政治家の少数者集団、精鋭集団としての色彩をうすめたが、この状況のもとにおいて党の強固な統一を確保するために提起されたのが、「民主主義的中央集権主義の原則」[10]であった。これは一九〇六年のストックホルムの党大会において提案され、規約にとりいれられた。この原則は彼の「討論の自由、行動の統一」という言葉によって表現されるが、「行動の統一という範囲以外では――われわれが有害とみなす行動、諸決定にたいしても、もっとも広範に、自由に、討議し、論議すべきである」と述べられているように、「プロレタリアートの行動は、統一されなければならない」という原則のもとにあった[11]。したがって民主主義的中央集権主義は、R・コンクェストの指摘するように、「実際には『中央集権主義』が最初にあって、本質的であり、したがって『民主主義的』は『中央集権主義』に依存した。なぜなら中央が実際には地方の代表の構成を命令したからである」[12]。

このようにレーニンの変化をうながしたロシア革命の示す労働者大衆の自発性は、ルクセンブルクに大衆の自発性への信頼をふかめるとともに、労働者大衆にたいする党の指導の重要性を深く認識させることになる。

彼女は「第一幕のあと」において「ペテルブルクでの出来事からわれわれが与えられるのは、革命的な楽天主義という基本的な教訓である。あらゆる近代的な政治的および社会的な生活条件が全然ないところにおいて、数千の障害をのりこえて、あらゆる中世的な堡塁を破って、資本主義的な発展の鉄の法則がつらぬかれ、あたらしい階級がうまれ、プロレタリアートの成長につれて、階級意識もたくましく育ってゆく」[13]と述べ、また『大衆スト、政党および労働組合』において、「それゆえロシア革命がわれわれに教えるのはなによりもまず、大衆ストライキはけっして人工的に『つくられ』たり、あてどもなく『決議』されたり、『宣伝』されたりするのではなく、ひとつの歴史的現象であり、これは一定の契機のもとに社会的な諸条件のなかから、歴史的な必然性をもって生まれるということである」[14]と従来の彼女の考えを確認する。

なるほど大衆ストに典型的に現れる労働者大衆の革命意識の成長は、前衛組織の計画と指導とによって一方的に育成されるものではない。とはいえそれは、適切な前衛党の指導を必要とし、それなしには勝利をかちとりえないであろう。「社会民主党は革命時代のさなかにも、政治的な指導をひきうけねばならない。闘争にスローガンと方向をあたえ、政治的闘争の戦術をととのえて、プロレタリアートの現存の力、すでに喚起され活動されているすべての力が、闘争のあらゆる局面とあらゆる瞬間に実現され、この力が戦闘状態において発揮され、社会民主党の戦略が果断さと尖鋭さからみて、けっして実際の力関係の水準以下に立つことなく、むしろこの力関係に先行するようにすること、これが大衆ストライキの時期における『指導』のもっとも重要な課題である」[15]。

こうしてルクセンブルクのばあいも、社会民主党の前衛としての性格は明らかである。ただそれは、レーニンが

『何をなすべきか』において主張するような少数の職業革命家のみの組織ではなく、広範な革命的労働者に開かれていなければならない。「社会民主党は、もっとも啓発されもっとも階級的に目覚めた意識とをそなえたプロレタリアートの前衛である。党は運命論者的に腕をこまねいて、『革命的状況』の到来と、あの自発的な民衆運動が天から降るのを待つこともできないし、待つことを許されてもいない。反対に党はつねに情勢の展開に先んじ、それを促進するよう務めねばならない。しかし党はこのことを可能とするには、時を問わずにあてもなく突然に大衆ストライキの『合言葉』を発することによってではなく、むしろなによりもまず党は、広範なプロレタリア層に革命的なこの時代の不可避的な到来と、これをもたらした社会的要因と政治的帰結を明らかにすることによってである。もっとも広範なプロレタリア層が社会民主党の政治的な大衆運動に加わり、逆に社会民主党が大衆運動において現実の指導権を掌握し、運動全体を政治的な意味において指導すれば、党は闘争の生じた時期において、まったく明確に首尾一貫して決然とドイツのプロレタリアートのために、戦術と目標を提示できなければならない」[16]。

日露戦争のもたらしたロシアにおける革命的状況は、こうしてレーニンには労働者階級の自然発生性を、ルクセンブルクには前衛の組織的指導の重要性を認識させ、P・フレーリヒやJ・B・ネットルなどのいうように両者を接近させたようにもみえる[17]。さらには、すでにみた両者のそれぞれの一方の過重視に注目してか、ミシェル・ロヴィのような「レーニンとローザ・ルクセンブルクとは部分的に対立しあい、補足しあう二つの対極のようにみえながらも、しかし根本的には同質のものにほかならないといえるのである」[18]といった主張もある。しかし両者のこれまでの見解の相違とそれぞれの変化をみても、なおわれわれはレーニンにおける前衛組織の重視とルクセンブルクにおける労働者大衆の自然発生性の重視の違いに注目せざるをえない。この違いは僅かなものといえるかもしれな

い。しかし「意見の相違は小さなもののように思われるかもしれないが、実際には大きな意義がある」[19]とは、レーニンが前衛をめぐる論争について述べた言葉であり、彼がこの言葉によって示そうとしたのは、小さな意見の相違ともみえるものが、現実の運動の結果においては大きな相違をもたらすということであった。

この大きな相違は、第一次世界大戦末にあらわれたロシア革命におけるレーニンの成功とドイツ革命におけるルクセンブルグの失敗との相違となって示される。

(1) トニー・クルフ、浜田泰三差訳『ローザ・ルクセンブルク』現代思想社、一九六八年、五八、六四―五、八〇ページ。
(2) レーニン「党綱領について」、『レーニン全集』第六巻、五〇三ページ。
(3) 渓内謙『現代社会主義の省察』岩波書店、一九七八年一二―二ページ。
(4) D・マクレラン、重田晃一他訳『アフター・マルクス』新評論、一九八五ページ。
(5) レーニン「ロシアにおける革命の始まり」、『レーニン全集』第八巻、八六―七ページ。
(6) 同右、八七ページ。
(7) レーニン「革命の日々」、『レーニン全集』第八巻、九四ページ。
(8) レーニン「党の再組織について」、『レーニン全集』第一〇巻、一六―七ページ。
(9) 同右、一八ページ。
(10) レーニン「ロシア社会民主労働党統一大会に提出戦術綱領」、『レーニン全集』第一〇巻、一四八ページ。
(11) レーニン「ロシア社会民主労働党統一大会についての報告」、同右書、三六九ページ。
(12) R. Conquest, *V. I. Lenin*, 1972, p. 39.
(13) Rosa Luxenburg, "Nach dem ersten Akt", *Gesammelte Werke*, Zweiter Halbband, 1972, S. 477.
(14) Rosa Luxenburg, "Massenstreik, Partei und Gewerkschaften", *Gesammelte Werke*, Band 2, S. 100.
(15) Ibid., S. 134-5
(16) Ibid., S. 146.
(17) パウル・フレーリヒ、伊藤成彦訳『ローザ・ルクセンブルク―その思想と生涯』御茶の水書房、一九八七年、一八九ページ、

およびJ・P・ネトル、諫山正他訳『ローザ・ルクセンブルク』河出書房新社、一九七四年、三七六ページ。
(18) ミシエル・ロヴィ、山内旆訳『若きマルクスの革命理論』福村出版、一九七四年、二六七ページ。
(19) レーニン「論集『一二年間』の序文」、前掲全集第一三巻、九五ページ。

五、ロシア革命とドイツ革命

ロシア革命については「ほとんどすべての著者が、レーニンがすぐれた政治指導者であったことを認めており、レーニンがいなかったならばボルシェヴィキは一九一七年に権力を獲得できなかったであろうということを一致して認めている」[1]。そして、ある歴史家は「彼のはたした役割は、イギリス革命・フランス革命におけるクロムウェルやロベスピエールのそれを、はるかにまさるもの」[2]とし、そこからまた「彼の行動は、ナポレオンの行動が一九世紀に残した跡よりもはるかに大きな跡を二〇世紀にのこした」[3]とさえ述べる。

ところで政治指導者、なによりも革命家としてのレーニンについては、強烈な個性、非妥協性、権力への不屈の意志、異常な集中力、冷静な現実認識、洞察力、統率力、時におうじての決断力、革命への献身、苛酷な戦術家など、言葉としてはさまざまの表現が用いられているが、注意しなければならないのは、レーニンがこれらの個々の言葉では表現できない全体としての指導者的資質、M・ウェーバーがカリスマという概念によって表現しようとした資質をもったことである。この資質については、その直接の体験者でなければ表現しにくいもののようである。B・D・ウルフはこれを表現するのに、ポトレーソフの次の言葉を引用している。ポトレーソフはレーニンの敵対者であり、革命後は亡命したが、それだけにこの種の言葉としては信用できるであろう。「プレハーノフにせよ、マールトフにせよ、あるいは他のいかなる者にせよ、レーニンが民衆の上に加えた直接の催眠術的影響力の秘訣、

私はあえていう、民衆を支配する力をもってはいない。プレハーノフは尊敬されていた。マールトフは愛されていた、だがしかし、レーニンだけは、あたかも彼が異論のないただ一人の指導者でもあるかのように、無条件に服従されていた」[4]。

N・ヴァレンチノフはポトレーソフの同様な表現を引用したうえで、「私はポトレーソフよりも強くレーニンの催眠術的影響力に感化されてしまっていた。……レーニンの言葉と行動の一致（見かけだおしだとのちにわかったが！）のみに私がひきつけられたのではない。何か別の要素があった。おそらくそれは、ポトレーソフがいっているような神秘的な魅力であろう。レーニンには、私が指を触れられないような、きわめて重要な何かがあるように思えた。それはいったい何だろうか。私ははっきりとはわからなかった」[5]。ヴァレンチノフもまた一度はレーニンの魅力にみせられながら、彼から去ったひとりである。

このヴァレンチノフはさらにレーニンのこの魅力、あるいは催眠術的影響力による彼の信奉者との関係について、他のところでは「イリイッチ」（尊敬される老人の意）と「スターク」（長老の意）というレーニンへの敬称にかんして、次のように書いている。「私がレーニンと会った時、彼は三四歳だった。……『老人らしい』ところなどぜんぜんなかった。……にもかかわらず、ボルシェヴィキたちは（ボグダーノフと私を例外として）レーニンを『イリイッチ』とよんでいた。……しかし、レーニンを『イリイッチ』と呼ぶときには親しみはこめられてはいなかった。彼の取り巻き連中は誰もあえて彼に対して冗談をいおうとか、背中をたたこうなどとしなかった。レーニンと他の党員とのあいだには眼にみえない壁があった。そして誰もその壁を乗り越えようとはしなかった」[6]。この壁はなんであるか。次のレーニンにたいする「スターク」の敬称の説明がこれを明らかにしてくれる。「レーニンが『スターク』と呼ばれたのは、彼の『知恵』が根本的に承認されていたということなのである。レーニンの知恵に

たいする敬意は、かれに対する抗し難い服従心と結びついていた」[7]。

こうしてレーニンは彼の「催眠術的影響力」あるいは「神秘的な魅力」によって、ヴァレンチノフの表現によれば「取り巻き連中」によって「抗し難い服従心」の対象とされていたが、この影響力や魅力はどこから生じたのであろうか。これはおそらくは、彼について指摘される革命への彼のひたむきな献身ではなかったかと思われる。これは妻クルプースカヤが二度目の亡命時代のレーニンの生き方について述べた次の文章に示される。「彼は以前と同じように、あらゆる抑圧と搾取をにくみ、プロレタリアートの事業に、勤労者の事業に自分をささげ、彼らの利益を心にかけ、彼の全生活は、事業の利益に従属していたのであるが、それはおのずからそうなったので、それ以外の生き方は彼にはできなかったのである。彼は同じように、はげしく、そして鋭く日和見主義と闘い、どんな事柄でも、事業を中止しようとするものと闘った。彼は以前と同じように、運動を後にひきもどそうとしているのに気がつけば、もっとも親しい友人とも決裂し、事業のために必要とあれば、昨日の敵にもあっさりと、同志的にちかづくことができ、以前と同じように、腹蔵なく、率直にすべてを話した」[8]。

ここで「プロレタリアートの事業」あるいは「勤労者の事業」とは、もちろん彼らの解放のための革命を指し、L・フィッシャはこれを簡潔に「レーニンの情熱を呼び起こすものは革命しかなかった」[9]と述べている。そして、このようなレーニンの革命への献身は、彼と対立したメンシェヴィキのT・ダンさえも感服させた。K・ヒルはダンのレーニンについての次の言葉を紹介している。「毎日毎日、まる二十四時間、革命に熱中し、革命のことばかりを考え、夢にみるのも革命のことばかりというような人間は一人として他にいない。こんな人間をどうすることができようか?」[10]。この言葉はB・D・ウルフによってもレーニンをよく表現するものとして引用されている[11]。

労働者のための革命へのこのような献身は、具体的にはどのように現れたか。「レーニンはすべての個人とすべ

ての社会的できごとを革命の戦略家としての観点から考えていた」[12]。そして革命の戦略家としての彼が関心を集中させたのが、かの前衛の組織の問題であった。「組織と訓練の重要性をレーニンが強調したのは、ある意味では革命を理論から実践に移そうという彼の鋼鉄のような決意を反映するものであった」[13]。G・ジノヴィエフはレーニンをG・V・プレハーノフと比較して、この点を次のように述べる。「回顧してみると、九〇年代後半からプレハーノフとレーニンとのあいだにはいわばある種の分業が行われていたことが今日はっきりとわかる。これは二人が別に申し合わせていたわけではないが、実際はそうなっていた。プレハーノフの強い側面は理論面で、論敵と哲学的論争をひきうけていた。そしてこの領域では並ぶもののない巨匠であった。これにたいしてより若いレーニンは、最初の著作以来、全注意を社会的、政治的問題に、党と労働者階級の組織化にむけていた。こういった意味で彼らは一時期たがいに補いあっていたのである」[14]。

このようにジノヴィエフは、たんに両者の補いあいの関係を述べるのみでなく、さらに別の箇所においては、これを両者の行動様式の相違とも関係させて、レーニンを高く評価する。「同志レーニンがいつでもプレハーノフにまさっていた点は、彼があらゆる場合に組織的に行動しようと努めるいわば合唱団員であったということであろう」[15]。ここには、レーニンがすでに示した影響力と魅力とによって、合唱団を従えた状況も示されている。合唱団員であるよりはむしろ合唱団の指揮者であったというべきであろう。

このレーニンをL・フィッシャーはトロツキーと比較して「トロツキーが主として大衆に訴えるのを得意とした人間であったのに対し、レーニンの方は主として組織をつくるのにひいでた人間であった。トロツキーが演壇を必要としたのに対し、レーニンは事務局を必要とした」[16]と述べ、さらに別の箇所においては次のように説明する。「レーニンは、生まれつきの組織者であった。彼は一つの目的に没頭する人々が、状況を変え、大衆の意識を変え、

歴史を作ることができると考えていた。彼はよく訓練した人間の破城つちをきたえようとしていた。組織が、政治綱領に優先した。手段が最も重要であり、政策よりも重要であった。じっさい、彼の政策は組織そのものであった」[17]。

この「組織者」としてのレーニンのつくりあげたものがボルシェヴィキ党であった。B・D・ウルフによれば、彼と彼の信奉者との関係においてみたように、「行動的な党のあらゆる卓越した組織者に見られるように、ウリャーノフの人格の力は、彼の思想の力に劣らず、人々を使徒と教祖との絆にも似たそれによって、彼に結びつけ」[18]、この状態のもとでは「民主主義的中央集権主義」も理論的にはともかくも、現実にはこれまたすでに示したように、中央集権主義による党の統一を確保するための手段となった。そのためレーニンにとっては「中央統制とイデオロギー的同質性、これが『統一』であった」のであり、その結果として、ポトレーソフによれば「レーニンはつねに、彼が党であり、彼が一人の人間に集中された運動の意志であると感じ、その通りに行動していた」[19]。またN・スハーノフによればボルシェヴィキ党は「レーニンの欠けた状態になると、それは体から心臓をもぎとったり、頭を切断したりすることも同然ではなかろうか。……党内にレーニンにつぐ者が誰もいなかった。少数の有力な将軍がいたとしても、レーニンがいなければ、太陽のない数個の巨大な惑星と同じく、結局は何もないのに等しい」[20]。

ロシア革命を成功させたものとしあげられるのは、革命家としてのレーニンとともに、彼のつくりあげたボルシェヴィキ党である。

ロシア革命の発端となった二月革命は、全く自然発生的ではなかったにしても、蜂起を計画的に指導した政党は存在せず、当初はメンシェヴィキが影響力をもち、やがて社会革命党が台頭してきたが、レーニンが四月に帰国してボルシェヴィキの指導権を掌握し、トロツキーが七月にボルシェヴィキに加わることによって次第に他の政党に

たいして優位をしめるようになった。とはいえ数的にはなおメンシェヴィキ党、さらには社会革命党のほうが優勢であった。しかしメンシェヴィキ党は国際主義左派と穏健派グループ、社会革命党は左派と右派といったように、内的な分裂状態に苦しみ、さらにはブルジョア政党との連立論まででて、蜂起した大衆に明確な方向を示すことができなかった。これらの諸政党にたいしてボルシェヴィキ党は、レーニンの多年の努力のもとに他の政党に比較すれば統一的に行動することができ、彼の指導のもとに世界最初の社会主義革命をなしとげたのであった。この点を歴史家の叙述によってみよう。

二月革命が民衆の自然発生的な蜂起を中心に展開したのにたいして、「十月革命はまったく対照的である。その物理的破壊力は、すぐれた指導者によって有効に組織され、無駄に流出発散することなく、精密な機械力のように〝敵〟の心臓部に肉迫したのである。その蜂起は、レーニン、トロツキーなどによって戦略的・戦術的に緻密に計算され慎重に準備され、ほとんど無血で成功したのであった。少数精鋭の厳格な規律をもった戦闘的前衛政党、戦場における指揮官が部下に対してもつ権限を中央委員会が党の全組織に対してもつといったボルシェヴィキ党の本質が、十月革命においてもっとも効果的に機能したのであった」[21]。

ボルシェヴィキ党が右に述べられているほど整然と統一的に行動したかどうかについては、異なった見解もあり、レーニンのロシアへの帰国までは他の政党と同じようになんらの積極的な行動もとりえなかった[22]。しかしレーニンが党の指導権を掌握するや、ボルシェヴィキ党が他の党にたいしては比較的によく統制され、そのことによって他の政党を圧して権力を獲得することができたことについては異論はない[23]。まさにロシア革命は、レーニンと彼のひきいるボルシェヴィキ党によってなしとげられたのであった。しかし、それゆえにレーニンの現実主義的な指導による権力の獲得は、大衆の自然発生性を重視するルクセンブルクの批判をまねくことになった。この批判のなかに、

一時は接近したかにみえた両者の相違が明確に示されるとともに、ドイツ革命におけるルクセンブルクたちの失敗が予知されてもいる。

彼女はロシア革命の進行中は反戦運動のゆえに捕らえられてブレスラウの監獄のなかにあったが、新聞によって革命の進行をおい、「ロシア革命論」を書いた。これは彼女の生存中は刊行されず、死後はじめて公刊された。

この論文において彼女は、一方においては「レーニンの党は、真に革命的な党の使命と義務とを理解していた唯一の党」[24]であったとして、レーニンの党と彼の偉業とをたたえながらも、他方においては革命政府がとった農業政策と異民族政策とを批判するとともに、レーニンの革命の指導に、彼女がかって批判したレーニンの前衛理論の非民主的な性格を認め、それを次のようにはげしく批判し、それがもたらす危険を指摘した。

彼女はまず一七年一一月に行われた立法議会の解散をとりあげ、トロツキーの解散理由、すなわち立法議会が十月革命という決定的は転換期前に選出されたことから、「その構成において新しい事態ではなく、古臭くなった過去の姿を反映し」[25]、したがって事態は急速に発展していることとて、「民主的な制度の鈍重な機構はこの発展にほとんどついていけない」[26]とする理由をとりあげ、これは「まさにすべての革命的な時代の歴史的な経験と全く対立する」[27]として、むしろ歴史的な経験が「われわれに示すのは、国民世論の生きいきとした流れがたえず代表団体を洗い、そこへ浸透し、それを導くということ」[28]であるとし、大衆の世論と政治的な成熟とが議会に生きいきとした影響をあたえ、敏感な政治的雰囲気をもたらすことをイギリスの長期議会やフランスの三部会において示す。そしてさらにソビィエト政府がソビィエトを基盤として定めた選挙法を批判するとともに、「労働大衆の健全な公共の生活および政治的な活動のきわめて民主的な保障、すなわち出版の自由、結社および集会の自由」[29]を革命政府が廃止

したことをも非民主的であると批判する。

これらの批判の背後にある彼女の根本思想は「社会主義はその本質からして上から与えられもしなければ、命令によって導入されもしない」[30]ということである。「社会主義の実践は、幾世紀にわたるブルジョア的な階級支配によって堕落させられた大衆の全体的な精神的革命を必要とする。利己的な本能の代わりに社会的な本能が、惰性の代わりに大衆のイニシャティブが、すべての苦痛を克服する理想主義が必要とされ」[31]、そして「この再生への唯一の道は、公共の生活そのものという学校と無制限なもっとも広範な民主主義と世論である」[32]。なるほど革命の混乱はさまざまな悪徳と堕落とに道を開くであろう。しかし病気の伝染と病菌とにたいしては太陽光線の自由な作用がもっとも有効な浄化と治療の手段であるのと同じように、「革命そのものとその再生の原理は、革命によって喚起された大衆の精神生活と能動性と自己責任であり、それゆえに革命の形式としてのもっとも広範な政治的自由である」[33]。

こう述べてレーニンの指導の非民主性を批判する彼女は、レーニンの誤りがプロレタリアートの独裁を民主主義と対立させた点に求め、社会主義革命は民主主義を廃止するのではなく、ブルジョア民主主義に代わって社会主義的な民主主義をつくり出すのであり、それが民主主義であるかぎりは、ひと握りの独裁者によって上から人民に与えられるものではなく、普通選挙、何物にもさまたげられない出版および集会の自由、自由な論争などによる政治への人民の積極的な参加によって創造されるものであるとする。したがってプロレタリアートの「独裁は、大衆の能動的な参加から一歩一歩あらわれ、大衆の直接の影響のもとにあり、全公共の統制のもとにおかれ、人民大衆の政治的訓練の成長から生じなければならない」[34]。

この観点からすれば、「レーニンとトロツキーの意味での独裁の暗黙の前提は、社会主義的な革命は、できあが

った計画が社会主義政党の鞍の中にあり、それが精力的に実現されればよいといった事柄であり」[35]、そこでは人民大衆の自発的な活動は圧殺され、公的制度は生命を失い、官僚制度だけが営みを続けることとなる。これは「たしかに独裁ではある。しかしプロレタリアートの独裁ではなく、ひと握りの政治家たちだけの独裁、すなわちブルジョワ的な意味、ジャコバン党的な意味での独裁である。……さらにはなお、そのような状態は、暗殺、人質の射殺などの公共の生活の野蛮化をもたらすにちがいない」[36]。

ルクセンブルクがこう書いてまもなく、ドイツは一八年の一一月のキール軍港の水兵の反乱にはじまる騒乱のもとに、ドイツ共和国の成立が宣言され、皇帝は亡命し、休戦条約が締結されたなかに革命運動は拡大し、革命的雰囲気のなかに次第に社会民主党が優勢となっていった。一貫して反戦の立場をつらぬいてきた彼女は、一六年に社会民主党の主流派にたいしてスパルタクス・ブントの結成に参加し、すでにみたように反戦運動のためにロシア革命を獄中で迎え、一八年の一一月に釈放された。彼女はただちに革命運動に参加し、K・リープクネヒトらとともにドイツ共産党の樹立に参劃し、一二月三〇日に結成大会をむかえた。そして翌一九年一月四日のベルリン警視総監アイヒホルンの罷免を契機とする「一月闘争」を迎え、共産党は武装闘争に入ったが、蜂起は鎮圧され、一五日に彼女はリープクネヒトとともに虐殺された。

なぜ彼女たちの革命は挫折したか。これにはさまざまな事情があげられる。ただロシア革命の成功と比較したばあい、ロシアにおいては革命的な状況の進展のなかにおいて、社会革命党やメンシェヴィキ党が数的には優位をしめながら、内的な分裂のために政治的な影響力をもちえなかったのにたいし、すでにみたようにボルシェヴィキ党が、レーニンの指導のもとに統一的にまさに前衛として行動しえたのにたいし、ドイツのばあいは多数派社会民主党が議会民主主義以上のものを求めなかったのにたいし、社会民主党から分離した独立社会民主党は革命を志向し

ながらも、内部において状況の分析と戦略戦術の規定において意見を異にし、有効に対処できなかった。

これまでに示した彼女の労働者大衆についての見解からも伺われるが、「組織問題、組織をつくるための技術上の問題をローザは無視し、軽蔑さえしてきた」[37]。この彼女を反映するかのように、彼女がまず所属した「スパルタクス派は労働者大衆の組織化より啓蒙をより重視していた」[38]とされ、また「組織的には、スパルタクス派のあゆみはのろかった」[39]とされる。またドイツ革命を考察した別の政治史家は次のように述べている。「『一月闘争』の期間中、党中央指導部の各メンバーが抱いていた見解および同指導部の具体的な処置の詳細については、……依拠すべき資料が殆ど存在していないが、リープクネヒトの行動に見られるごとく、党指導者の間に充分な連絡、調整がとられず、従って、党として統一ある指導を行うことが出来なかったこと、また、それと聯関して、党中央指導部が革命闘争の過程に殆ど影響を及ぼすことが出来なかったということは、否定することの出来ない事実であろう。このようにして、『一月闘争』というドイツ革命におけるもっとも重要な闘争の一つにおいて、党中央指導部はその指導力の欠如を遺憾なく暴露することになったのである」[40]。こうしてドイツ革命は、ロシアのばあいとは異なって、決定的な時期における共産党の組織的指導の欠如によって、失敗におわった。このことはルクセンブルク自身のよく自覚するところであった。一月戦争は、政府の武力鎮圧のもとに一二日頃ほぼ終末をむかえたが、彼女はこれを顧みて次のように書いた。

「……今度のいわゆるスパルタクス週間の敗北はどうだろうか？　それは、突進する革命的エネルギーと状況の不十分な成熟による敗北か　それとも行動の弱さと中途はんぱによる敗北であったのか？

その両方である。この危機の二分された性格、一方でのベルリンの大衆の強力な決然たる攻勢的な行動と、他方のベルリンの指導部の不決断と臆病さと中途はんぱさとのあいだの矛盾が、この最近のエピソードの特別な特徴で

ある。

指導部は役にたたなかった。しかし指導部は大衆によって、大衆のなかから新しく創りだされることができるし、創りだされなければならない。大衆こそ決定的なものである。彼らは岸壁であり、その上に革命の究極の勝利がきずかれる」[41]。

ここには指導部の失格とともに、彼女らしく、なお大衆への信頼が語られている。この文章が共産党の機関紙『ローテ・ファーネ』に発表された一月一四日の翌日の夜、彼女はリープクネヒトとともに逮捕され、虐殺された。したがって、この文章が彼女の「最後の論説」となった。

(1) W・ラカー、中沢精次郎訳『革命の運命』未来社、一九七三年、一二七ページ。
(2) 倉持俊一『ロシア現代史I』山川出版社、一九八〇年、二七六ページ。
(3) ロイ・メドヴェージェフ、石川規衛訳『一〇月革命』未来社、一九八九年、四二ページ。
(4) B. D. Wolfe, *Three Who Made A Revolution, A Biographical History*, Pengin Books, 1966. p. 170,
(5) N・ヴァレンチノフ、門倉正美訳『知られざるレーニン』風媒社、一九七二年、八六ページ。
(6) 同書、八一ページ。
(7) 同。
(8) クループスカヤ、内海周平訳『レーニンの思い出』上、青木書店、一九五四年、一六ページ。
(9) ルイス・フィッシャー、猪木正道他訳『レーニン』上、筑摩書房、一九八八年、七〇ページ。
(10) クリストファー・ヒル、岡稔訳『レーニンとロシア革命』岩波書店、一九五五年、五一—二ページ。
(11) B. D. Wolfe, *op. cit.*, p. 262.
(12) アンジェリカ・バラバーノフ、久保英雄訳『わが反逆の生涯——インターナショナルの死と再生』風媒社、一九七〇年、一三五ページ。
(13) G. Barraclough, *An Introduction to Contemporary History*, Penguin Books, 1967, p. 211.

(14) G・ジノヴィエフ、阿倍正明訳『ロシア共産党史』新泉社、一九七九年、七六―七七ページ。
(15) 同右、九一ページ。
(16) ルイス・フィッシャー、前掲訳書、六九ページ。
(17) 同右、五四ページ。
(18) B. D. Wolfe, *op. cit.*, p. 170.
(19) *Ibid.*, p. 294.
(20) ロイ・メドヴェージェフ、前掲訳書、四三ページより。
(21) 倉持俊一、前掲書、一八五ページ。
(22) W・ラカーはボルシェヴィキ党について次のように書いている。「ボルシェヴィキは党としてはライバルよりも統制はとれていたけれども、決して完全なものではなかった。状況が急速に変わりつつあったので、党の下部組織にくい違った指令が流れたものと思われる。(W ラカー、前掲訳書、八一ページ)。
(23) E・H・カー、原田三郎他訳『ボルシェヴィキ革命』I、みすず書房、一九六八年、八八ページ。
(24) R. Luxemburg, "Zur russische Revolution", *Gesammelte Werke*, Bd., 4, 1979, S. 341
(25) *Ibid.*, S. 353.
(26) *Ibid.*, S. 354.
(27) *Ibid.*
(28) *Ibid.*
(29) *Ibid.*, S. 358.
(30) *Ibid.*, S. 360.
(31) *Ibid.*, S. 360-1.
(32) *Ibid.*, S. 362.
(33) *Ibid.*, S. 361.
(34) *Ibid.*, S. 363-4.
(35) *Ibid.*, S. 359.

(36) *Ibid.*, S. 362.
(37) J・P・ネトル、諫山正他訳、『ローザ・ルクセンブルク』上、河出書房新社、一九七四年、二一ページ。
(38) 安世舟『ドイツ社会民主党史序説』御茶の水書房、一九七七年、二七五ページ。
(39) J・P・ネトル、前掲訳書、二九三ページ。
(40) 篠原一『ドイツ革命史序説――革命におけるエリートと大衆』岩波書店、一九五六年、一〇九ページ。
(41) R. Luxemburg, "Die Ordnung herrscht in Berlin", *Ausgewalte Reden und Schrijten* II, 1951, S. 713-14.

六、ブハーリンのエルート理論批判

ルクセンブルクがロシア革命におけるレーニンへの批判を書いたのは一八年秋であり、それが公刊されたのは二二年である。その一年前の二一年に、右のレーニンの前衛理論とマルクスの階級理論にもとづいて、社会主義にたいするエリート理論の批判を正面から論駁しようと試みたのが、すでに述べたようにブハーリンであった。この問題について彼が論じた『史的唯物論』は、その副題の「マルクス主義社会学の一般的教科書」が示すように、マルクス主義の立場から社会科学の一般的な諸問題を論じたものであり、必ずしもエリート理論の批判のみに当てられてはいない。しかし、それだけに簡潔に問題の要点がとらえられ、論述も明快である。以下この問題について彼の述べるところをみよう。

彼によれば階級は、エリート理論、とりわけパレートが言うように能力の差によるものではなく、社会の生産関係によって規定される。「階級について語るばあい、それによって理解されるのは、生産における共通の位置によって、したがって分配における共通の位置によって、それゆえにまた共通の利害（階級利害）によって結合されている集団である。しかし、それぞれの階級があくまでも統一的な全体をあらわし、そこではすべての部分が同じで

あって、ヒンツがクンツと全く同じであると考えるのは、まったく単純である」[1]。すなわち階級は、社会の生産関係における共通の地位、そこから生じる共通な利害によって、同質的な統一的なものとして結ばれはする。しかし階級を構成する各人は必ずしもまったく同じ状況のもとで成長し、同じ生存状況にあるわけではない。とすれば階級もまた完全に同質的な集団ではない。このことは近代の労働者階級についてもあてはまる。

なるほど彼らは資本家階級にたいしては比較的同質的ではある。しかし個々の労働者についてみれば、彼らはそれぞれの知力や能力において異なるのみではなく、また彼らのおかれている経済的な状態も同じではなく、さらに彼らの出身も農民あるいは職人、あるいは町人などとさまざまであり、教育や教養の程度もたがいに相異し、それらの相異におうじて彼らの意識においても異ならざるをえない。かくて「プロレタリアートは、その状態よりして統一的でないのとまったく同じように、その意識よりして統一的ではない。彼らは他の階級に比較すれば多少とも統一的ではある。しかし、そのさまざまな部分を考察すれば、右に述べた観念が明らかとなる」[2]。

しかし階級のこの内的な非統一性と対外的な統一性こそが、階級を指導するための政党を必要とする。階級が内的に同質的であり、はじめから統一されているとすれば、指導は必要とはされない。しかしそれが異質的な成員からなり、さまざまな利害の対立を含むところから、そのような内部の対立する利害を調整し、階級を統一化して他の階級に対抗するために政党の指導が必要とされる。そしてブルジョア政党が、ブルジョア階級内の異質的な利害の対立を調整し、国家機関を掌握し、それを通じてプロレタリアートを抑圧し、統一的なブルジョア階級の共通の利益を実現するとすれば、労働者階級もまた、その内的な異質性を調整して、労働者階級の利益を統一化し、ブルジョワ階級との闘争において勝利へと導くための政党、つまりは労働者階級の前衛党を必要とする。

したがって、この前衛党は、労働者階級の「もっとも前進的な、もっとも訓練された、もっとも結合した部分」[3]

として、「階級の利益をもっともよく代表するもの」[4]であり、そのようなものとして労働者階級を指導する。この前衛党は、右のように階級を指導するかぎりは、階級の指導的部分として、階級そのものからは区別されなければならない。これはちょうど人間において身体から頭が区別されなければならないのと同じである。そして身体が頭に導かれることによってのみ正しく行動することができるとすれば、同じように労働者階級は、前衛党に導かれることによってのみ階級闘争に勝利して自らの解放をかちとることができるであろう。

ところで階級とその前衛党とのあいだの右のような関係は、また前衛党内における一般の党員と指導者とのあいだの関係についても妥当する。すなわち労働者階級の前衛党は労働者階級全体にたいしては、そのもっとも先進的な部分としてて比較的同質的であり、統一的ではあるが、しかしそれじたいとしては、そのすべての成員が同一の水準にあるわけではない。「しかし『存在』の資本主義的な諸条件と、たんに労働者階級のみでなく他の階級さえもの低い文化水準とは、プロレタリアートの前衛、つまりは彼らの党さえもまた同質ではないといった状態をつくり出す。彼らは労働者階級の他の部分にくらぶれば多少とも同質的ではある。しかしこの前衛、すなわち党そのもののさまざまな部分をとれば、われわれは容易にその内的な不同質性を確かめることができるであろう」[5]。労働者階級の成員がそれぞれ出身と教育の程度、生活状態と階級意識などにおいて必ずしも同じでないことから、彼らの前衛党を必要とするとすれば、同じように前衛党もまた、そこに結集した人びとが必ずしも教養の程度と階級意識、闘争経験と指導能力などにおいて同じではないことから、彼らもまた彼らの「指導者」を必要とする。「現実には前衛においてさえ完全な同質性は存在しない。そしてこのことが、『指導者』と呼ばれる多少とも固定した集団の必要性をひきおこす根本原因である」[6]。そして労働者階級が前衛党の指導に従うことによって、その内的な異質性を克服して統一的に資本家階級と闘争し、革命をかちとることができるとすれば、一般の党員もまた、「党の正し

い傾向をもっともよく表現する」[7]この「指導者」の指導に従うことによってのみ、革命に勝利することができるであろう。

だがしかし、このように階級がその内的異質性から前衛党を必要とし、前衛党がまた同じ理由から指導者を必要とするとすれば、そこにはつねに少数の指導者あるいは支配者が生じることになり、これはまさしくエリート理論の指摘する少数支配の必然性を示すものではないか。「階級は党によって、党は指導者によって支配し、いっさいの階級といっさいの党とは、いわゆる彼らの指令部をもつ」とすれば、「マルクス主義者の語る共産主義的な無階級社会はそもそも可能であるか」[8]。

この問いを発してブハーリンは、次のように答える。すなわち「ロシアの地主は彼らの高級官僚をつうじて支配し、高級官僚は完全な指令部、完全な層をあらわしていた。けれども、この層はけっしてそれ以外の地主たちと対立しなかった」[9]。それは地主が、生活条件においてこれらの高級官僚よりも低くなく、また文化水準においても高級官僚に類似し、また高級官僚は地主層から補充され、高級官僚は地主層の「組織者」あるいは「指導者」として、地主の利益を代表したからである。したがって高級官僚は地主層とはけっして対立することなく、いわば共通の利益によって結びつき、支配階級として大衆を抑圧してきた。してみれば地主階級が高級官僚を「組織者」あるいは「指導者」として必要とするのは、階級社会の階級支配によるものである。そして階級支配が、社会主義以前の階級社会の生産力の低さに対応するとすれば、来るべき社会主義社会においては、階級が消滅して生産力が飛躍的に発展することとなり、そこでは階級支配のための「組織者」あるいは「指導者」も存在しなくなる。

すなわち階級は生産力の不十分な発展の結果であって、そこでは管理は必要ではある。しかし将来の共産主義社会は、私有財産制の廃止とともに高度の生産力の発展をもたらし、この生産力の発展は、一方においては階級支配

を消滅させ、権力を変化させるとともに、他方においては教育を普及させ、固定的かつ封鎖的な集団による権力の独占を打破し、平等な社会を実現するであろう。階級支配が消滅すれば、権力はもはやかってのように「人間を操作する力」であることをやめ、「機械を操作する力」へと変化するとともに[10]、教育の普及は、そのような「機械を操作する力」の排他的な独占さえも許さなくなろう。「なぜなら、そのような独占集団が形成されるための根本状態が消滅するだろうからである。すなわちミヘルスが永遠のカテゴリーへと高めたもの、すなわち『大衆の無能』が消滅するだろうからである。『大衆の無能』は、すべての共同社会の必然的な属性ではけっしてない。それもまた経済的および技術的条件の所産であり、それらの条件は一般に文化的な存在や教育状態をつうじて現れる。将来の社会においては、組織者の巨大な過剰生産が行われ、したがって支配集団の固定性が失われるであろうと、いうことができる」[11]。

こうして共産主義社会においては、支配階級の消滅とともに権力を掌握するエリートも消滅し、そこでは「大衆が大衆たることをやめ、調和的に構築された統一的な人間社会が実現されるであろう」[12]。

以上の観点からするばあい、エリート理論は大衆の無知無能を永遠化してエリート支配を必然視し、またエリート対大衆の考えによって前衛党を階級から離反させ、指導者を党から離反させることによって、階級支配を永遠化するものであり、したがって反階級的、反革命的な反動理論ということになろう。

ブハーリンについては、「当時はソヴィエト・マルクス主義の最高の代表者」[13]とされ、「一九一七年までにはボルシェヴィキ理論家としての彼の名声はレーニンにつぎ、あるものの心中では彼に比肩するものはいなかった」[14]とまでいわれ、レーニンさえも彼を「弁証法を学ばなかった」と批判しながらも、また「党のきわめて貴重な、最大の

理論家だけでなく、最大の寵児」[15]と評価している。右の彼のエリート理論への反論にも弁証法の欠如は指摘されようが、またそれは基本的にはマルクス主義の階級理論とレーニンの前衛理論にもとずく巧みな有効な反論である点においては「最大の理論家」としての片鱗も伺われる。それだけにまたそこに含まれる問題も明確に示される。

まず問題とされるのは、労働者階級と前衛党、さらに前衛党と指導者との関係である。前衛党は右のように労働者階級の指導的部分、同様に指導者は前衛党のもっとも先進的部分であるというが、それらがいかにしてそうであるのかは、必ずしも明らかではない。それは「もっとも前衛的」とか、「正しい傾向をもっともよく代表する」とかいわれるが、それをだれが判定あるいは評価するのであるか。前衛党が労働者階級の頭、指導者が前衛党の頭になぞらえられるばあい、身体すなわち労働者階級あるいは前衛党は、それぞれ前衛党あるいは指導者に服従することのみが要求されることとなり、これはまさしくわれわれがレーニンの前衛理論にみた中央集権制にほかならない。

これと関係してブハーリンが、資本主義社会から社会主義社会への過渡期、すなわち革命の時代の移行期における「退行」(Entartung)について語っていることに注意しなければならない。彼はすでにみたように、将来の社会主義社会における階級の消滅と、権力の変質について語りながらも、その社会主義社会への移行期に退化への傾向が現れるとする。すなわち社会主義革命は、彼の示すように資本主義社会においてまだ同質的とはなっていない労働者階級によって、その先進部分としての前衛党の指導のもとに行われる。しかも革命は社会的混乱と、そしてまたそれにそもなう生産力の一時的低下と物質的な保障の欠如とをもたらすであろう。してみれば「退化への傾向、すなわち階級的萌芽としての指導層が分離して行く傾向が不可避的に存在することになる」[16]として、彼は革命後に新たな支配階級が出現する危険の存在することを指摘する。しかし彼はこの「退化への傾向」も、生産力の増大と教育の独占の廃絶という傾向によって相殺され、「新しい階級区分が発生する可能性は根本的にとりのぞかれる」[17]

と主張する。

ブハーリンのこの理論が発表されるまでに、いわゆるブルジョワ政党はもちろんのこと、メンシェヴィキ党および社会革命党も非合法化され、一八年にロシア社会民主労働党から改名したロシア共産党の一党独裁が成立していた。そして二一年三月に第一〇回の党大会を迎えたが、この開催中に生じたクロンシュタットの反乱は、党内の分派行動の禁止をもたらし、党内における指導部の独裁、さらには個人独裁への道を開くこととなった。クロンシュタットの水兵と労働者とは一九〇五年の革命以来つねに革命の先頭にたってきた。それだけに彼らは共産党への権力の集中にたいして抗議し、言論と結社の自由を要求し、民主的な社会主義社会の建設を主張したのであった。これが「反革命」の名のもとに鎮圧されるとともに、党内の分派もまた禁止されることとなった。クロンシュタットの反乱は共産党への権力の集中にたいする反抗であったが、実は党内においても同じように、党の指導部の一元的な統制にたいする反対が生じていたのである。こうして党は一九〇三年の大会以来、社会民主労働党内においてレーニンによってボルシェヴィキ派として自らを育ててきた分派活動を自ら否定するにいたった。

もちろん民主主義的中央集権制は存続し、形式的には自由な討論と建設的な批判が許されるであろう。しかし、なにが自由な討論であり、なにが建設的であるか、あるいはなにが分派であり、なにが反党的であるか、これを決定するのは党指導部である。してみれば権力のいっそうの党指導部への集中は不可避的であり、ひいてはまた指導部を掌握する個人への権力の集中も考えられないことではない。スターリン体制とレーニンとの関係については専門家のあいだにおいても見解が相違する。しかしレーニンがスターリンの権力の強大化を危惧し、有名な「遺書」において彼を除去するために「明らかに分派行動」[18]をとらざれるえず、しかもそれさえ無効におわったことは、レーニンの生存中に達成された彼のいわゆる「民主主義的中央集権制」が、制度としてはいかに民主的な下からの抑

制を欠いたものであったかを示している。

レーニンの死後、次第に、しかし確実にスターニンの権力は強まり、二四年にはトロツキーが軍事人民委員を解任されたのをはじめとして、ジノーヴィエフ、カメーネフと次つぎと排除され、ブハーリンもまた三七年には逮捕され、翌年には反国家活動の罪によって死刑された。この間にルクセンブルクもまた、トロキストの名をふせられて、ロシアのマルクス・レーニン主義からは否定されるにいたった。そして三六年のスターリン憲法においては「労働者と農民の社会主義国家」の建設がなったことがたからかにうたわれるとともに、「ソ同盟における全権力は、勤労者代議員ソビエトによって代表される、都市および農村の勤労者に属する」（第三条）とされ、「また労働階級、勤労農民およびインテリゲンツィヤのうちの最も積極的かつ意識的な市民は、自由意志にもとづいて、共産主義社会を建設するための闘争において労働者の前衛部隊であり、かつ勤労者のすべての社会的ならびに国家的組織の指導的中核をなすソ同盟共産党に団結する」（第一二六条）[19]と党の独裁が規定された。

このスターリン憲法の制定された三六年には、二九年以降国外に追放されていたトロツキーによって『裏切られた革命』[20]が書かれたが、このトロツキーは四〇年にメキシコにおいて暗殺され、右の独裁制は、「一国社会主義」時代はコミンテルンをつうじて各国共産党に、第二次大戦後は直接に社会主義国に要求、むしろ強要されたことは、周知のところである。

（1） N. Bucharin, *Theorie des Historishen Materialismus, Gemeinverstandliches Lehrbuch der Marxistischen Soziologie*, 1922, S. 357.
（2） *Ibid.*, S. 358.
（3） *Ibid.*, S. 359.
（4） *Ibid.*, S. 359-60.

(5) *Ibid.*, S. 360.
(6) *Ibid.*
(7) *Ibid.*
(8) *Ibid.*, S. 363.
(9) *Ibid.*, S. 364.
(10) *Ibid.*
(11) *Ibid.*, S. 365.
(12) *Ibid.*, S. 366.
(13) G. Lichtheim, *Marxism, An Historical and Critical Study*, 1961, p. 314.n.
(14) S. F. Cohen, *Bukharin and the Bolshevik Revolution*, 1974, p. 17. このブハーリンの理論上の名声については、E・H・カーも「ブハーリン伝説」として「同時代の経済学や哲学の研究においても年期の入ったブハーリンは、党内の一権威者となったのである」(E・H・カー、鈴木博信訳『ナポレオンからスターリンへ』岩波書店、一九八四年、二一三ページ)と述べている。
(15) レーニン「大会への手紙」、『全集』第三六巻、七〇四ページ。
(16) N. Bukharin, *a. a. O.*, S. 365.
(17) *Ibid.*
(18) 河合秀和『レーニン』中央公論社、一九七一年、二一二ページ。
(19) この三六年に制定されたソ同盟憲法については、書物によって訳文がやや異なるが、ここでは宮沢俊義篇『世界憲法集』岩波文庫、一九六〇年によった。
(20) L・トロツキー、藤井一行訳『裏切られた革命』岩波文庫、一九九二年。